

教材としての漢詩

〜漢詩史からの試み〜

三島 徹

**【抄録】** 漢詩は、我が国の文化思想に多大な影響をもたらしたもののひとつであり、また広く人々に親まれてきた。しかし、和歌や俳句が現代においても広く親しまれているのに比し、漢詩のそれはあまり現代の生活とは切り離されたものとなっており、多くの場合その出会いも、中等教育における国語の授業においてのみという貴重な機会となっている。そのような中で、漢詩のきまりなどの知識の修得に偏しがちであるという現状をふまえ、漢詩相互の関連を理解し、立体的な人間の営みの世界を味わう中で知識のよりよい定着をめざすことを試みようとするものである。

**【キーワード】** 漢詩史、精神史、興味・関心、教材の精選、合科・統合

序 論

その一 漢詩教材の現状

中学・高等学校における古典教材の中で、特に漢詩の教材は、我が国の文学や絵画など文化に多大な影響を与えたものであり、広く学習されるものとして配置されているが、古典に親しみ、慣れることを主眼とした中学校及び高等学校国語Ⅰにおいてはともかく、高等学校国語Ⅱ・古典Ⅰ・古典Ⅱにおいては、漢詩のきまり（とりわけ近体詩における）と訓読、そして解釈に終始し、いきおい作者の立場、作詩の背景を概略することで事足りりとする授業が展開しがちである。この場合、古典講読におけるように作品をより深めて読み味わうという形式を取り得る場合はともかく、古典Ⅰ・古典Ⅱ、および国語Ⅱでの漢詩の扱いは、他の古文や漢文単元のバランス上、多くの時間を割り当てるのがかなわないこともあり、先に述べた漢詩のきまりと訓読、解釈に重点が置かれ、その対象となる教材の配列も、五言古詩・七言古詩・五言絶句・七言絶句・五言律詩・七言律詩、そして唐の古詩・歌行あたりが詩形のバランスを考慮して取り上げられることになる。むしろこのこと自体は、古典そのものに親しむ機会が少ない現代高校生に示すべき、必要最小限の配列であると思われるが、実際の教室における取り組みとしては、作品一つ一つが短く、かつ完結しているため、いわゆる漢詩の学習としてのまとまりや漢詩個々との関連性を実感しにくいものにし、学習する側の立場に立つてみれば、脈絡のない作品を、単に形式の違う作品の例示として抜き取って示された、という希薄な実感しか持てないのではないと思われる。そして

教師側も、多くの場合は漢詩のきまりから導入し、せつかく学習したそのきまりを踏まえ、知識の定着をはかると共に解釈し味わうことに終始しがちなため、結果的には、提示された漢詩の相互における関連にはほとんど関心が及ぶことはなく、また教科書の配列においても、多くの場合、このような点は充分には考慮されることなく配列されていると言わざるを得ない。

さて、ここで教科書の配列においても、多くの場合このような点は考慮されることなく配列されていると述べたが、実際には、様々な工夫を試みている教科書も少なくはないので、その点について少し触れておく。

漢詩相互、あるいは他の教材との関連づけを教材の配列そのもののあり方として工夫している等の例（古典Ⅱの教科書に限って）としては、

- ① 「長恨歌」と「源氏物語（桐壺）」、「枕草子（第三十七段）」、「更級日記」などを一つの単元として取り上げ、漢詩文と日本の文化との関係を実感できるような工夫が見られる例。（大修館、東京書籍）
- ② 李白・杜甫・白居易などをそれぞれの単元として取り上げ、人物というひとまとまりで理解し鑑賞することができるよう工夫された例。（明治書院、旺文社）
- ③ 自然、民衆、人生などという主題でくくることでまとまりを持たせるよう工夫された例。（角川書店）

などがあげられるが、いずれも単元、小単元としてのまとまりをもち、その中での相互性関連性は認められるものの、いわゆる漢詩全体としてのつながりを形成するものではない。

## その二 「漢詩史からの試み」という意図

ところで、「漢詩史からの試み」という意図についてであるが、ここでいう「漢詩史」とは、必ずしも漢詩の変遷史という意味ではなく、むしろ漢詩に体现された人々の精神史というべきものである。つまり、我が国における韻文学・短詩形文学が、万葉集から古今和歌集、新古今和歌集を経、さらに連歌の時代を経て俳諧、川柳・狂歌、そして明治以来の短歌、俳句へと変遷する中で、それぞれの時代を映し出し、それぞれに文学の対象が変遷し、それぞれに美の対象が変遷していったことは、すでに教室においても折々に語られ、それが我が国の「詩」である和歌、俳句学習の縦糸として相互性をもたせ、生徒の教材理解に大いに貢献していると考えられるが、その点漢詩においては、このような体系として認識され、教室において語られるということがきわめて少ないものと思われる。その結果、古体詩、近体詩という大筋の流れは説明されても、そこに体现された人々の心と、それによるところの表現や形式の変化として、一貫した関連性を理解できないために、せつかく用意された教材は詩のまじりを理解するためのサンプルでしかなく、まして他の漢詩教材との関連づけもなされることなく、学習する生徒の実感としては、単に断片的な「知識」として詰め込まざるを得なくとさせてしまっているのではなかろうか。そして、このような中から「漢詩は短いからよいが、よくわからない」という学習者の少なくない実感が生じることになるのではないだろうかと思われるのである。

ところで、漢詩に限らず短詩形文学の魅力は、そこに凝縮された人間の感動を、見知らぬ作者と共有し共感することにあるといえよう。この点においては、実際の漢詩の授業においても重要な学習事項として考慮され、学習課程の中に必ず組み込まれるものであるが、これこそが、我が国の古典におけるそれのように、体系的つながりとして語られることがないために、単にその作者の、その時代の、その背景におけるものとして、断片的にしか受け取られないままになってしまっていると思われるのである。

本研究は、この断片的な知識の定着に終始しがちな漢詩教材の取り扱いについて、古典の人々の心の表現の変遷という視点から各時代の詩を関連づけ、各形式の変遷を理解させることによつて、ささやかながら「漢詩史」を体系的に実感させ、断片的でよく分からないという学習者の素朴な実感に伝えることを試みようとするものである。

## 本 論

### 一、「漢詩史からの試み」としての教材論

## その一、詩形の変遷という視点で

漢詩史からの試みとして第一に着目せざるを得ないのは、詩形の変遷による配列である。しかし、この点については詩経以来の古体詩から唐の近体詩へという流れで当面は充分であるといえよう。但し、楽府の存在、並びに唐以降における古体詩のあり様についても配慮の外に置くことはできない。生徒にとっては、古体詩から近体詩という流れ図の定着と共に、それらを単線的推移と理解して、近体詩以降の古体詩の存在に違和感どころか無いものと誤解している例が少なからずあるからである。これらについては、むしろ李白・杜甫・白居易などの例によつて、詩が感動の発露の手段として、複線的、多岐的に積極的に進化変遷しているものであることを実感させ、ひいては我が国において近代以降、現代においても、心の表出の重要な手段として和歌・俳句が活用され、発展し続けていることと併せて理解させるよい機会になるものと思われる。

## その二、精神史の変遷という視点で

漢詩史からの試みの最も眼目とすべきはこの精神史である。しかし、中国文学を語る上での精神史という語の持つ意味はあまりに広く、思想哲学の歴史を紐解き、整理し、そこに漢詩を当てはめるといった教材の配し方では、逆に煩雑さを増し、高校生という導人的時期における概要理解の意義に反することになる。従つて、従来からある旅・人生・政治・送別などのテーマに沿つて選択し、且つ相互性をもつものを配列すべきであろう。例えば、中国の思想哲学の双壁ともいべき儒教的価値観、老荘的(隠逸的)価値観との相克と複合に着目した配列などは、自然に対する視点、人生に対する視点、政治に対する視点など多くのテーマにおいて、その史的関連性を容易に見出し得よう。

## その三、文学史的意義という視点で

「漢詩史からの試み」として第三に着目すべきことは文学史的配列である。先に述べたように、本試みは「古典の人々の心の表現の変遷という視点から各時代の詩を関連づけ、各形式の変遷を理解させることによつて、ささやかながら「漢詩史」を体系的に実感させ、断片的でよく分からないという学習者の素朴な実感に伝えること」にあるのであるから、高校生として理解しておきたい中国古典文学の歴史に関わる著名な詩人・作品に可能な限り触れておくべきであろう。しかし、年間に配当されるであろう「漢詩の時間」を考えれば、おそらくは少なくて四時間、多くても八時間前後というのが現実であ

ることは想像に難くない。しかもこのような限られた時間の中で、漢詩のきまりの理解と修得、作品の時代と背景の理解、漢文の訓読法と解釈法の修得と、盛り沢山な内容を扱わねばならないのであるから、文学史的意義を持つ著名な作者・作品をできる限り押さえないという良心的希望は、ここでは大幅に抑制し、多くを割愛せねばならないことになる。しかし、先に述べた詩形の変遷・精神史の変遷という各視点を満足させる漢詩教材の配列に際して、文学史的意義を持つ作者・作品を踏まえることは、「漢詩史」を明確に踏まえることの一つの基準にもなり得ようし、何よりも著名な作品を配することは、生徒自身による予習復習の便を増すことになる。また、現実には日常生活において漢詩漢文に触れる機会が極端に少なくなりつつあるとはいえ、少しでも人口に膾炙した作品であることは、学習者の興味関心を引き出す上でもより効果的であるといえる。

この学習者の興味関心を引き出すという点について追言すれば、核家族化・少子化の時代とはいえ、いまだ漢詩漢文の世界に対しては、社会的にも多くの人々が興味関心を示しているという現実がある。このことは中学生・高校生においても同様であり、習字・書道という分野において、漢字・漢文・漢詩に親しむ機会を持つ者は少なくなく、また少数ではあるが、吟詠という分野において、課外活動や地域社会での活動に取り組んでいる生徒も見受けられるのである。更にまた、名句・名言として耳にする機会も決して少なくはなく、このような様々な機会にすでに出会っている漢詩漢文の世界と改めて授業で出会い学ぶことは、学習の上での重要な興味関心付けにつながり、学習意欲向上の動機付けにもなるものといえる。その意味でも、教材配列における文学史的意義という視点は、その見方を広く故事名言の典故となった作品、書の題材となった作品（墨揚必携―など検索は容易である）、吟詠の対象となり易い作品などにも目を向ければ、むしろ教材の精選を求められる昨今においては、学習者の興味関心を引き出しやすく、且つ漢詩史的教材の選択と配列に多大な便宜を与えてくれるものといえよう。

## 二 試みとしての漢詩教材

### 各視点による教材の可能性

#### その一 試みとしての漢詩単元

##### 配当学年及び科目と配当時間

本研究は、漢詩の学習を詩形の変遷・精神の変遷の相互性・関連性を意識的に理解させることで、知識としての漢詩のきまりの修得や訓読解釈力の定着としての作品の読み取りという断片的な学習の弊害を避けることであ

る。したがって配当学年は、すでに中学国語や高等学校国語Ⅰで近体詩のきまりを修得し、また漢文の訓読法や書き下しのきまりに慣れた高等学校三年生とし、科目は国語Ⅱ、または古典Ⅰ・Ⅱに配当するのが望ましいと思われる。本研究においては、古典Ⅰに配当し、六時間を配当するものとして以下を試みることにする。ともあれ、六時間配当としては長短あわせて十一篇という作品数はかなり窮屈なものになる。これについては、その取り扱いについて後述する。

#### その二 試みとしての漢詩教材と配列

すでに述べた漢詩教材選択の視点を元に、以下「試みとしての漢詩教材」を配列してみる。この配列にあたっては、以下の観点によって配列した。

##### ① 詩形の変遷として

詩経の四言詩をはじめとし、樂府、五言古詩、五言・七言絶句、五言・七言律詩を押さえ、歌行体を最後にした。この間、七言古詩を採用しなかったのは、七言という形式の成立が絶句・律詩の成立に重なりと考えたことと、配当時間という物理的制限から鑑みて、取り扱い数として無理があると判断したからである。この点については、五言古詩を文学史・精神史的観点から二篇選んでいるが、これらのいずれかと七言古詩を入れ替えるという可能性は残されている。また、排律についても配当時間との関係で割愛したが、七言古詩同様の可能性は残されている。

歌行体として李白・杜甫の作品を選んだが、文学史的配列としては本来もつと以前に配置すべきものである。しかし、絶句・律詩といった近体詩が定着する中で、樂府という形式があらためて見直され、更に新しい詩風が注がれていくという文学史的意義を実感させるためにも、敢えて最後に配置した。

さて、本来詩形の変遷の理解には、これらの他に楚辞を加えなければならないが、このことについては文の学習との関連事項として触れることとし、作品としては敢えて取り上げなかった。

以上、詩形の変遷としては、単に詩経からやがて五言、七言と発展したというのではなく、四言から五言・七言への発展の過程に樂府があり楚辞があり、一方は詩の五言・七言を生みだし、一方は賦など文の発展を促していったことを理解させることができよう。特に四言から五言・七言詩への発展は、表意文字として、且つ同音異字を多数持つという漢字による表現の特異性を理解させることが可能であり、また、そこからなぜ奇数句になるのか、あるいは音韻上・リズム上

のきまりとして定着する平仄の必然性についても理解を容易にさせることができよう。

② 文学史的変遷として

先に述べたように、李白・杜甫の歌行体を除いては、周代から唐代に至るまで歴史順に配列し、詩形の変遷、精神詩の変遷が理解し易いようにした。但し、精神史的変遷との関わりの中で、唐については盛唐を中心に選択した。この文学史的変遷に沿った配列により、教科書や補助教材などの年表を活用した政治的・歴史的背景の変遷という観点と関連させた理解が容易になるものと思われる。そしてこれらのことから、学習者にとってはいわゆる「詩人」ととらえている漢詩の作者たちが、多くの場合は為政者そのものであり、少なくとも政治や歴史の変遷に関わりを持ちつつ存在したという事実が体得できよう。このことは、現代社会においての「文学者」という通念とは大きく隔たるものであり、そこにこそ日本・中国における古典文学の中心的担い手の特殊性を見出すことができるのであり、逆の見方をすれば、知識人＝為政者という存在の特殊性を理解することができる。そして、このような中から、政治上の主張や感慨を中心とする漢詩漢文の特殊性、独創的に自由な表現だけでなく、正統的権威に沿

った表現を重んじ、先人の表現を踏まえようとする漢詩漢文の特殊性が理解できよう。さらにこれらのことは、以下の精神史的変遷をたどることを容易にさせる重要な要素でもあるのである。

③ 精神史的変遷として

精神史の変遷は、文学史的変遷の中で述べた教科書や補助教材での年表の活用と一体化したものにならざるを得ない。学習者は、この年表による政治的・歴史的背景の理解と平行して、儒・老荘・仏とその時代に生きる人々との関わり、政治と詩人との関わりなど様々な問題を体得することとなり、それぞれの時代に生きた人々の呼吸を感じるようになる。その意味においては、世界史の授業との関連などについても大いに意識することにより、科目間の合科・統合を覗んだ取り組みの可能性をも持つものといえよう。しかし、漢詩における精神史的変遷をたどる場合、当然ながら高校生という段階における理解の容易性と妥当性を勘案しないわけにはいかない。本研究では、自然・旅・人生・別離という比較的理解し易いであろうテーマに限定して選択し、それぞれのテーマをそれぞれの詩人がどのように感得し表現したかを追うことができるように配列した。

その二 試みとしての漢詩配列

	時代	作 品	詩 形	関連するテーマ				
				自然	旅	人生	別離	政治
①	周	〔燕燕〕詩経・風	四言古詩			○	○	○
②	漢	〔東門行〕	樂 府			○		○
③	魏	〔詠懷詩〕(阮籍)	五言古詩	○		○		○
④	東晋	〔歸園田居 其二〕(陶淵明)	五言古詩	○		○		○
⑤	南宋	〔登石門最高頂〕(謝靈運)	五言古詩	○	○	○		○
⑥	盛唐	〔登鸛鵲樓〕(王之渙)	五言古詩	○	○		○	
⑦	盛唐	〔送元二使安西〕(王維)	七言古詩	○	○		○	
⑧	盛唐	〔過故人莊〕(孟浩然)	五言古詩	○	○	○		○
⑨	中唐	〔香奩山下新卜山居草堂初成偶題東壁〕(白居易)	七言古詩	○	○	○		○
⑩	盛唐	〔子夜吳歌 四 秋〕(李白)	歌 行 体	○			○	○
⑪	盛唐	〔兵車行〕(杜甫)	歌 行 体			○	○	○

その三 「試みとしての漢詩単元」の展開

本試みは、すでに述べたように六時間配当として設定した。この六時間という配当の理由は、授業内における漢詩ひとつひとつの細部にわたる解説を想定していないことによるといつてよい。前記の作品を全て授業内で読解し解説して鑑賞するところまで扱わずすれば、おそら

くは十時間配当でも足りないほどであろう。しかし、これもすでに述べたように、高等学校国語Iにおいて、すでに訓読のきまりや書き下しのきまり、漢詩(近体詩)のきまりを修得していることを前提にしての設定であるから、その部分については学習者の予習によってあらかじめ準備されるような配慮をしておくべきであると考えからである。また、文学史的観点からの体得を具体的

なものにするためにも、教科書付録の年表や便覧・総覧といった補助教材を利用して、事前学習の段階で関連作品の位置づけが理解できるような、書き込み式の学習補助プリントを準備するなど、工夫を要すると考える。このように自主的な下調べを促し、それを活用した授業にすることで、多くの教材を相互に関連させ、具体化させて扱うことにより、従来の断片的な知識習得に陥りがちな漢詩単元を改善しようとするのが本試みなのである。

### ① 予習指示

われわれ授業者は、前単元の終了以前に次単元の予告をし、準備すべき事柄について指示することが通常である。本試みにおける単元の事前の指示は、以下の事柄となる。

#### 「本文予習」の指示

本文の予習指示については、ノートの利用方法など、授業者によっても様々な工夫があろうから、ここでは具体的なノートの使い方などはともかく、予習としてノートに学習しておくべき項目だけを列挙しておく。

- 本文をノートに書き写す
- 書き下し文を書く
- 口語訳を施してみる (分かる範囲でよい)
- 教科書の注を中心に、分からない語を辞書で確認しておく

対象生徒によっては、以上のような点がひと通り学習でき、書き込めるような予習プリントを準備することも考えられる。その際、授業で確認すべき事柄をも加えておき、その予習プリントをそのまま授業でも活用できるようにしておけば、事前学習・予習の大切さを理解させるよい機会になろう。また、作品によってはかなり長編にわたるので、安易に教科書準拠参考書などに頼らないよう、予習の軽減をはかる上でもプリントの活用は工夫すべきであらう。

#### 「関係文学史事項整理プリント」予習指示

このプリントは、便覧・総覧などの補助教材を日常的に活用し、その扱いに慣れた生徒を対象とする場合はとりたてて必要とはしないであろうが、本試みの眼目のひとつでもあるので敢えて概説しておく。

このプリントの目的は、いわゆる略年表の中に本単元に関連する事項を中心とした文学史的事項を掲げ、それによって授業で学習する作品や作者たちの歴史的位置づけを体得させるということにある。したがって、時代や

王朝名、主な事件などについては年表から抜き書きすればよい程度の穴埋め式とし、文学の形式・ジャンルについても、文・詩の二点程度を追うことができればよいと思われる。むしろ、すでに学習した、あるいは今後学習するであろう作品や作者名をおおよその位置に明記し、また、本単元で学習する作品についても、授業時に記入できるよう空欄を設けておくなどの工夫をしておきたい。また、漢詩の形式の変遷を追うことができる項目も用意しておきたい。

以上は、生徒自身の予習によってこのプリントをある程度まで完成させることにより、生徒の歴史的観点を触発しておこうという試みであるが、対象生徒によっては、授業の中で補助教材を活用しながらこのプリントを整理し記入しつつ文学史的観点を自覚し、単元で学習する作品を歴史の中で確認するという方法があってもよいと思う。ともあれ、予習として指示した場合にも、授業において確認解説の作業は必要なのであるから、対象生徒によって使い分けが必要であらう。

なお、ここでいう対象生徒とは、予習をしてもらうかどうかではなく、漢文関連の文学史や世界史の授業における東洋史をすでにどれだけ学習しているかといった点の違いに着目して述べているのである。学校によっては、カリキュラム上世界史との連携が必ずしもうまくいかない場合もあろうし、世界史を選択していない生徒もあり得、また補助教材の取り扱いの違いがある場合もあり得るのでこのように記した。

### ② 授業の展開

#### 単元内配当時間

六時間の配当を前提にした試みであるから、その授業内容はかなり制限される。したがって、書き下し文、重要語句など、従来漢文の授業で中心となる事柄の多くの部分を予習に委ね、授業ではその確認に留めることで本単元の目標である「漢詩史からの試み」の学習にあてるものとする。

#### 第一時

- 予習事項の確認。

本文予習

関係文学史事項整理プリント

- 関係文学史事項整理プリントを利用して概略の確認
- 「燕燕」「東門行」の学習

#### 第二時

- 「詠懐詩」「歸園田居」「登石門最高頂」の学習

#### 第三時

- 「登鸛鶴樓」「送元二使安西」「過故人莊」の学習

第四時

- 「香奩峯下新下山居草堂初成偶題東壁」「子夜哀歌」の学習

第五時

- 「兵車行」の学習
- 次時の指示(単元のもとめとしての発表の準備など)

第六時

- 単元のもとめ

「漢詩整理カード」の作成と活用

本単元の目標を達成するためには、作品個々における表現や作者の心情の整理が欠かせない。したがって、せっかくなかなかの予習を指示しておいても、それが十分に生かせなくては何の意味もないことになるから、この「作品整理カード」を作品ごとに記入させ、後に関連する作品との比較をする上で活用させるようにする。

【カード作成例】

漢詩整理カード	年組	番氏名( )	
題名【	】	作者名【	】
詩の形式【	】	押韻【	】
詩の背景(キーワード)			
テーマ別表現の抜き出し、またはメモ			
<input type="radio"/> 自然			
<input type="radio"/> 旅			
<input type="radio"/> 人生			
<input type="radio"/> 別離			
<input type="radio"/> 政治			

このカードには、以上の他に主題をまとめたり生徒自身の感想をまとめたりする項目を工夫するのもよいと思われるが、カードの記入を授業時の各作品を学習した

直後という設定にすると、時間的にどうであるか、授業者の考え方と対象生徒の状況にもよると思われる。この記入の時間を作品学習直後とするのは、のちに関連作品と比較する場合に、対象生徒が共通理解の上で関連を理解整理することができるようにという配慮である。もともと、グループ学習などが日常的に行われていて、慣れているという対象生徒の場合は、単元の作品終了後にグループごとにテーマを配当し、そのテーマ別に変遷について討議整理して発表しあうという授業も考えられる。いずれにしても、生徒にしてみれば訓読・書き下し・口語訳・重要語などが終われば漢詩の授業は事足れりと考えがちであり、往々にして市販の教科書準拠参考書を丸写しにした学習で満足しがちであるが、そのような学習姿勢へのテコ入れとしても、大切な活動といえよう。

なお、カードの中の「詩の背景(キーワード)」は、授業で学習したり、先の「関係文学史事項整理プリント」から得られた、その作品成立の歴史的背景や作者の立場などをキーワードで整理する項目である。○の乱、左遷、隠逸、帰郷など、必要最小限の単語をいくつか羅列する程度にとどめたい。また、「テーマ別表現の抜き出し」は、必ずしも漢文ではなく、書き下し文であってもよいし、量的に多い場合や抜き出しにくい場合は要約やメモであってもよい。この意味でも、かなりの部分が授業者の助言を必要とすると思われるので、授業内での記入が必要であろうと思われるのである。

結 論

本研究は、断片的な知識の定着に終始しがちな漢詩教材の取り扱いについて、古典の人々の心の表現の変遷という視点から各時代の詩を関連づけ、各形式の変遷を理解させることによって「漢詩史」を体系的に実感させることを試みようとしたものである。したがって、中国史・中国文学史といった知識的背景はもちろん、漢詩の基本的な書き下し、漢文訓読の知識、書き下しの知識など、学習者に知識的背景として要求するものが少なくない。その意味では、高校国語における古典学習指導の全体的計画だけでなく、学習者が他の機会に身につけるであろう知識的背景の確認(世界史や倫理などとの連携)など、十分に確認しておく必要がある。しかしその事自体は、合科統合の論議を待つまでもなく、発達段階における学習者の状況を勘案した上での授業計画という点で当然のことであり、むしろ、とりわけ漢詩漢文が、高校国語の授業内容の中から配当時間的にも形骸化していく中で、各作品ごとに孤立化し、重要句形の確認と暗記に終始して無味乾燥な授業になりつつある現状は危惧すべきであり打開しなければならないものである。その意味におい

て、本試みの意図があるのであり、さらに飛躍の批判を恐れずに言えば、我が国の古典文学、絵画などの芸術、そして明治以来の文学などとの関連をも踏まえて、他の単元や科目と連携させることができれば、よりいっそう効果的なものになると思われるのである。知識習得に終始しがちな漢詩漢文の指導、魅力にとりつかれた自己陶醉型の授業に走りがちな漢詩漢文の授業。教材の精選がいつそう求められる中で、単に精選するだけでなく、いかに有機的に組み立てていくかを真剣に考えなければならぬと痛感する。本試みはその要求に応え得るものとはどうして思えないが、当面の課題の提起として例示した。